介護事業者はいま ＃592

特養 大原の杜2016

（洞爺湖町）

洞爺湖町の国道230号沿いにある旧大原小グラウンドで４月にオープンした特養「大原の杜２０１６」。新設特養を本体施設とし、町内既存の地域密着型特養「財田（たからだ）の杜」をサテライト特養に移行する道内初のケースだ。隣接する廃校舎体育館を活用した災害時避難所を備え、法人全体のバックアップ拠点の役割も担う。

木の素材が持つ力を活用

運営主体は胆振管内で多数の施設・事業所等を運営する社会福祉法人幸清会。２００８年から旧大原小校舎に法人本部を移し、法人内外向け各種研修の場や、体育館に備品等を常備した災害時避難所機能も併せ持つ「総合ケアセンター大原の杜」として活用してきた。

この廃校舎に隣接し特養「大原の杜」を新築した狙いは、地域サークル活動などにも開放している同センターを介した入所者と地域住民との交流促進のほか、もともと持っていた避難所機能を補完する意味もあるという。

具体的には、特養の居室面積16・5平方メートルを確保、非常時は個室を仕切り、２人部屋として利用することで、受け入れた被災者のうち、体育館で過ごすのが困難な高齢者らをユニット内で20人程度受け入れ可能となる造り。

定員50人規模では全国でも数少ない木造建築の「大原の杜２０１６」

行徳秀和施設長は「各地に複数の施設を持ち、中には自然災害リスクの低くない地域もあるため、被災地の入所者や住民の受け入れを想定した、法人全体のバックアップ拠点」と説明する。

特養大原の杜は定員50人で併設サービスはない。50人規模の福祉施設では全国でも数少ない木造建築としたのは、資材が高騰する中で建築費抑制だけではなく、湿度が一定に保たれることによる感染症予防、転倒骨折防止など、木の素材が持つ力を活用した生活空間・環境の良さにメリットを感じたから。

特殊な工法によって木造建築で本来必要な、屋根などの重みを支える柱を必要とせず、ユニット内は天井が高く、広々とした空間を確保している。

オープンから１カ月過ぎ、入所者は現在16人が生活し、10人ほどが契約済み。大半が町内または近隣町村の住民という。在宅サービスが十分整っているとは言えず、サービス提供地域も広い地域特性から、認知症や独居による特例入所が多く、平均要介護度は１・８と軽度者が多い状況だ。

開所が迫る３月に、法人全体の中途採用を含む入職者がユニット内に５泊する宿泊研修を実施。「入所者が暮らす前に職員が生活を体験することで、不便さを感じる部分や必要な備品等を洗い出した」。オープン後のスムーズな受け入れに役立ったという。

▲◀集団行事特有の楽しさを失わないよう、季節ごとのイベントや食事を大切にしている

入所者を決めた利用者家族からは、木造ならではの温かみ、福祉施設と感じさせないモダンな雰囲気、礼儀正しい職員に好印象といった声が寄せられている。

屋根を支える柱のいらない工法で建てられ、広々としたユニット共用部

居室は16.5平方メートルを確保、被災者受け入れ時は２人部屋としても利用可能

災害時など法人全体のバックアップ拠点

「財田の杜」をサテライトに

大原の杜から自動車で20分足らずの洞爺湖畔にある「財田の杜」（定員29人）は、13年４月オープンから３年が過ぎた。15年度までは関連の社会福祉法人大滝福祉会による運営だったが、今年４月に幸清会と法人合併。大原の杜のサテライト特養として新たに指定を受け、行徳施設長ほか、ケアマネ、管理栄養士を両施設兼務とするなど、効率的な運営に移行した。

財田の杜は若手職員の育成モデルの場にもなっている。３年前のオープニングスタッフとして、専門学校を卒業したばかりの６人を１ユニットに配置。自分たちで考え、挑戦できる環境に置く試みだ。

「現場未経験の若手であっても、上司の指示待ちではなく、裁量を持って業務に従事できる職場」というメッセージを伝えるとともに、奮闘し成長する若者の姿を通して、介護の仕事の魅力を発信するのが狙い。現在、このうち３人が20代前半で主任になり、３ユニットそれぞれのリーダーとして力を発揮しているという。

オープン前にユニット内で行った入職者対象の宿泊研修

入所者にもなじみの深い地元の祭事がユニット内で披露された

併設機能として、認知症介護実践研修・管理者研修などを行う会場を備え、20人ほどの少人数合宿型研修を提供。１階には稼働しているユニットと全く同じ造りの研修用宿泊設備があり、研修中はユニット内で生活体験ができる。

法人で初めて機能訓練担当PTを配置

隣接する財田温泉を利用しリフレッシュしながら学び、英気を養い職場に戻れる環境が好評で、例年、定員を上回る受講生を受け入れている。

個別と集団の融合に挑戦

スケールメリットを生かした職員の教育・研修が強みの幸清会は、早い段階から利用者一人ひとりのペースに合わせた個別ケアも推進してきたが、「集団行事特有の楽しさなど、個別ケア実践によって失われたものもあるのでは」と問題意識を持ち始めている。

行徳施設長が信頼を置き、財田の杜の現場を任せている佐藤知朗生活相談員も「毎日が日曜日の感覚で緩やかに時間を過ごすのも必要だが、刺激も必要」と話す。

当初は居室に閉じこもっていた入所者が、集団行事等に誘うと「参加したくない」と言いながら雰囲気を楽しみ、それをきっかけに他者との交流が深まり、生活に張りが出るという話がよくあるように、本心は参加したいのか判断できなくても、そうした働きかけ自体をなくすべきではないと考えるからだ。

隣接する旧大原小廃校舎は総合ケアセンターとして再利用。教室を活用した陶人形館など地域に開放

認知症介護実践研修・管理者研修など行う会場を備える「財田の杜」

今後、それぞれのスタイルでの生活を望む世代の増加が見込まれる中、個別ケアを実践しながらも、イベントがあれば一緒に出かけ、集団行事も行う方針に立ち戻ろうとしている。

「『嫌だ』『あなたのことが嫌い』といった言葉は『私のことを見てほしい』というサイン」と職員にも言って聞かせ、本当に嫌がっているのか、性格的なものか、あるいは認知症によるものなのかなど、「本心を見極めるのも専門職の腕の見せどころ」。むしろそこに面白みを感じながら、個別ケアと集団行事の楽しさを融合した新たなスタイルに向けた挑戦は続く。

■運営主体　社会福祉法人幸清会
■住　　所　洞爺湖町大原105―3
■電話番号　0142（89）3500